

史料紹介

天龍寺妙智院所蔵『謙斎雑稿』

はじめに

本稿は、天龍寺妙智院に所蔵される『謙斎雑稿』（以下、本書）の翻刻・紹介を試みるものである。妙智院三世の策彦周良は天文年間（一五三二〜五五）の遣明船の副使・正使を務めたことで知られ、現在妙智院には、その関連史料が「策彦和尚入明記録並送行書画類」一四種ならびに三一種という二つのまとまりを中心に伝存している。本書はこのうち三一種に含まれる。これらの多くは大日本仏教全書に収録され、また牧田諦亮氏によっても翻刻されているが、本書については、部分的に引用されてきたものの、まとまった翻刻はこれまで存在しなかった。本稿では、本書を全翻刻し、併せてその構成と内容について簡単な紹介を行うことにする。

一 構成

現状は縦二六・三センチ、横一九・五センチの四つ目綴の冊子で、索引の表紙が付されている。全二八丁のうち、一七丁裏の末尾に「墨付十八丁」、二八丁裏の末尾に「墨付十一丁」の文字が見られる。ここから

元来別々だった冊子が二点、合綴されていることが知られる。前半部は「墨付十八丁」との記述からすれば一丁不足であるが、脱落してしまつたのか数え間違いによるものかは判然としない。後半部丁裏のど下部には丁付が間々認められる。前半部の冒頭には「謙菴藁」とあり、右下に「妙智禅院」の朱方印（方二・九センチ）を捺す。後半部には内題・朱印とも見あたらない。

表紙には左肩に「謙斎雑稿」と直書きされ、右肩に「妙智禅院」の朱方印の捺された紙が貼付されている。この印は冊子冒頭に捺されるものと同文・同書体・同寸であるが印影に僅かな差異があり、一方が覆刻と見られる。表紙および外題の書き様は、同じく三一種に含まれる『松斎梅譜』『謙斎南遊集』と共通し、ある時期にまとめて整理された際に付されたものと考えられる。「謙斎雑稿」と名付けられたのも、おそらくはこの表紙が付されたときであろう。史料名としては内題をとるべきであるが、前述の通り本書は二点の冊子が合綴されたものであること、またすでに「謙斎雑稿」の名で多くの引用があることから、本稿も「謙斎雑稿」との外題にしたがうことにした。なお策彦周良の別号としては「謙斎・謙斎・怡雲子などが知られるが、「謙菴」は管見に入らない。

須岡白
田本井
牧和
子真樹

本書の大半は策彦が作成した詩句で占められているが、応酬相手の詩句のほか、書籍からの抜書・日記風の覚書・作りかけと思しい句の書き付けなど雑多なものも含んでいる。謙齋「雜稿」と名付けられた所以であろう。翻刻にあたっては詩句・メモ等を問わず、通し番号を付し、詩題・詩序が二首以上にかかる場合はそれぞれに小番号としてアルファベットを付した。その結果一六三種二二二点を確認した。前半部は一二二種一三九点、後半部は四一種八二点からなる。

前半部（1〜122、以下、算用数字および算用数字+アルファベットは後掲翻刻に付した整理番号）は、年次が判明するものは数点を除き、弘治〜天正年間（一五五五〜九二）のものである。すなわち遣明副使・正使の任を終えたあとに作成されたものである。作品だけでなく、雑多なメモも含み、筆勢は区々であって、折々に書き付けられたものと判断される。詩は年代順には並んでおらず、以前作成したものをまとめて記したものと即時のものとの混在していると考えられる。重複が五首（15と30、16と29、17と28、44と80、69と81）見られ、またあとで書き足そうと思ったのか、詩題・詩序は書かれているものの本文がなく、空白のままになっている箇所も見られる。前半部最後の120〜122は天正七年（一五七九）四月一六・一七・一八日付の日記風の覚書だが、策彦は同年六月晦日に寂しており、亡くなる二ヶ月前のものということになる。最晩年まで手元に置かれていた雑記帳と言えるだろう。

一方、後半部（123〜163）は、確認しうるものはいずれも天文年間のもので、入明中に作成した「再登山寺」と題する一首を除き、遣明船搭乗前後に周防山口滞在中に詠んだ詩、あるいは応酬相手の詩を中心とする。書きかけのものはなく、メモ・抜書の類も含まれず、筆勢は一樣である。なかに「怡齋」を「怡齋」と書き誤っている箇所があり（151）、自号を書き誤ることは考えにくいとすれば、後半部は策彦自筆ではな

く、後人の手になるものと考えられよう。これも年代順ではなく、類別とも言い難く、山口で詠んだものを集めようとしたという以上の意図を読み取ることは難しい。

二 諸書との関係および流布の状況

現在妙智院に伝わる策彦の詩集としては、本書のほか、『謙齋詩集』『謙齋南遊集』がある。³このうち『謙齋詩集』と共通する詩は五七首、策彦の入明中の詩を集めた『謙齋南遊集』と共通するものは一首（134）である。また初回入明時の日記である『初渡集』中に録されるものが二首（134・142）、『初渡集』には詩題のみ記され詩句を欠くが本書には詩題・詩句共に収録されているものが一首（141）、二回目入明時の日記である『再渡集』の表紙裏の余白に書き付けられたものが四首（5・9・13・15）見られる。⁴『謙齋南遊集』ならびに『再渡集』と共通する詩は『謙齋詩集』にも収録されているが、『初渡集』との共通分は収められていない。

近代以前の写本としては、一本を確認している。国立公文書館内閣文庫所蔵の『謙齋藁』と題する冊子本の後半に写されているのがそれである（以下内閣本）。⁵これは一丁表右下に「鹿王藏書」の朱長方印が捺された鹿王院旧藏本で、最初に『謙齋詩集』を写して「妙智以家本謄写了、于時元禄元年臘月 日、鹿王院家什」と奥書を記し、数紙の白紙を挟んで今度は本書を写して「妙智家本謙齋藁謄写了、朱校支竹六十三、一校了云爾、元禄第一臘月 日、鹿王家什」と奥書を記している。一見すると本書を丁替りや字配りに頓着なく頭から謄写していったもののようにだが、よく見ると整理・編集が加えられたものであることがわかる。このことは以下の諸点から明らかである。

第一に字句の修正や挿入記号による語順の変更などはすべて修正後の

ものが反映されている。第二に本書においては詩題を冒頭に一行取りで置く形と結句の後に置く形とが混在しているが、すべて冒頭に置く形に変更されている。また同一詩題にかかる詩が連なる場合、本書においては二首目以下に詩題として「同」「又」などを付す場合と詩題を記さずただ連ねている場合とがあるが、内閣本は各首に対して「又」を詩題として追加し、詩題を欠く14には「無題」の文字を足している。こうした整理・編集の過程で、若干の誤解も生じ、たとえば117には末尾に「鄭谷」として、晩唐の詩人鄭谷の「蓮」という詩の引用である旨が示されているが、内閣本ではこれを「鄭谷蓮」という詩題として掲げている。また159は結句の後に「怡斎散釈賛」と策彦が記した賛である旨の記載があるが、内閣本ではこれをやはり詩題として掲げている。内題を「謙菴藁」と正しく写す一方で、奥書には妙智院所蔵の「謙斎藁」を謄写したとあることなどを併せ考えると、内閣本が元禄元年（一六八八）に写したのは本書そのものではなく、本書前半部の冊子と後半部の冊子とを、統一基準を設けて整理・編集を加えながら併せ写して「謙斎藁」と名付けた別本であったのではなからうか。163は本書が下二句を「旅屋漏痕無力補、勅奴道是爾于茅」とするのに対し、内閣本は「旅屋漏無力補勅、奴道是爾于茅痕」とする。これは内閣本が参照した本が、「痕」を書き落としたので末尾に付し、引き出し線など何らかの符号を施して修正していたのを、その符号を書き落とした結果ではないかと推察され、ここからも内閣本が別本からの写であることが示唆される。

以心崇伝等によって元和九年（一六二二）に編纂された『翰林五鳳集』は、鎌倉期〜江戸初期までの五山僧の詩を多く集め、類別に排列したものである。策彦の詩も多く採録されており、本書に収められる策彦の詩については大半が収録されていることが確認できる。注目したいのは、このなかに「謙斎藁」と注記を付し、「怡斎散釈賛」を詩題とする

形で159の詩が収められていることで、ここから『翰林五鳳集』を編纂する際に参照されたのも本書そのものではなく、内閣本が写した別本であったのではないかと推定される。

一方、史料編纂所は一八八五〜八八年に妙智院所蔵策彦関係史料の謄写・影写をまとめて行なっているが、本書についても一八八八年に「謙斎雜稿」として謄写している。これは内閣本に見られるような整理・編集の形跡はなく、符号・修正痕を残したままの謄写であって、本書からの写と確認される。この頃までに本書は前半と後半が合冊された現在の形になっていたこと、一方で内閣本が参照した「謙斎藁」と名付けられた別本はすでに存在しなかったであろうことがうかがえる。

この編纂所作成の謄写本は内題を「謙菴小藁」とする。「藁」の草冠を「小」と読んだのであろう。慶應義塾メディアセンターには、同様に内題を「謙菴小稿」とする本書の写が所蔵される。これは幸田成友の旧蔵本で、一〇行二〇字の藍格罫紙に符号類を略して書写し、末尾に「西山妙智三世策彦和尚略伝」を付し、外題を「謙菴小稿全」とするものである。奥書等はないが、内題からして編纂所謄写本の系統を引くと考えられる。

三 内容

『謙斎南遊集』所収「晩過西湖」詩が何度か揮毫され、今日軸装の形で伝わっていることはよく知られているが、本書所収の詩もまた、そのような形での伝存を確認することが出来るものがある。大石利雄氏は現存する、もしくはかつて存在していたことが確認される策彦の著賛画を博搜され、本書や『謙斎詩集』等への賛の収録状況も併せて「策彦周良著賛画リスト」として一覽にされている（以下本リスト所載のものは「著1」のようにリストの作品番号を付記）。たとえば11は甲斐南松院

（著6）、29は出光美術館（著7）、39は尾張定光寺（著8）、42は茨城県立博物館所蔵の「渡唐天神図」（著9）に画賛として添えられている。¹⁰一方47も渡唐天神賛で、これは「未受用」と注記されているが、実際には揮毫されて流通していたらしく、大田南畝が文字のみを写し取ったものが伝わっている。¹¹7は栃木県立博物館所蔵「蔬菜図」に、¹²58は福岡市博物館所蔵「靈照女図」に、¹³134は大和文華館所蔵「金山図」に添えられていることが確認される。¹⁴また44神農賛・71達磨賛は『探幽縮図』（著37・38）に、85は『白鶴帖』所収「虎溪三笑図」（著25）に見出せる。¹⁵このほか86kが文字のみの作品として日本学士院に所蔵されている。¹⁶

こうした揮毫は求められて為すことが多く、本書にも求請者として多くの人名が記されている。67a・bの靈照女賛には織田信長が天正二年（一五七四）に二点同時に求めた旨の注記があり、96顔回賛には信長にも仕えた楠長庵が求めた旨の注記がある。89范蠡泛五湖図賛には三好日向入道の求めとあり、これは三好政権の中枢を担った三好長逸であろう。

このほか諸氏との交流を示すものとしては、まず冒頭に「次称名院殿領 御衣之韻」と題する詩が置かれている（1）。これは『称名院右府七十賀記』（宮内庁書陵部所蔵、函架番号405118）にも録されており、弘治二年（一五五六）三条西公条七〇歳の賀に関わるものであることが知られる。34a・bは竹園禪宮、すなわち伏見宮貞敦親王より团扇を下賜されたことに対する謝礼の詩である。

また14は永禄元年（一五五八）近衛前久が描いた画を広橋国光が得たのを記念し執筆したものである。近衛家に関わるものとしては、このほかに近衛前久が小倉山で紅葉狩りをしたのを聞いて詠んだという103aもあり、続けて前久とその子信基（信尹）の和歌が記されている（103b・c）。その直前の101・102は天正六年（一五七八）一〇月一二日ならびに一三日に聖護院道澄（近衛植家の子、前久の兄弟）に献上したという詩

の書き付けである。

94は「清芳院殿春天東一大姉大祥忌」とのみあって詩を欠くが、『謙斎詩集』には「天正三禊五月某日、清芳院殿春天東一大姉、俄然厭世、丁終焉之期、而殊有告逝之雅詠、可謂女中大丈夫也矣、日野一位尊閣弗勝悲嘆之至、列六字宝号於其上、而倭哥以見悼焉：」の序を持つ追悼詩が見え、『宣教卿記』天正三年五月一八日条に「柳原北向煩見舞二行也」、同六月一七日条に「富入道ヲシテ柳原へ北向訪二行也」などとあるのと併せると、柳原資定室の三回忌に際してのものと思われる。

策彦が長宗我部元親の請により天正三年「雪蹊」の号を撰し、併せてその室のために「水心」の号を撰したことは『大日本史料』同年四月是月条に見えるが、¹⁹73は同じ年、弟子の玉汝琳公の請に依えて、玉汝の父である土佐の大黒美作守に休室宗徹の道号法諱を与えたものである。

『謙斎詩集』には「土陽大黒氏有室某、廻予門生玉汝藏局之萱親也、至孝之餘、出紙子而斬法諱与別称、々曰玄永昌巖、遂併書以塞請之次、一偈重宣其義、九毛懸識不移易、百則機縁猶較些、公案現前夾山境、嶺猿抱子鳥啼花、」とする偈が収められており、おそらく同時にその室にも道号法諱を与えたのであろう。74は本文を欠くが、同様に玉汝の仲介で土佐の吉松備後守に実參紹玄の別号法諱を与えたもの。70もやはり玉汝の仲介で理泉尼なる人物に松室の号を与えたものである。理泉尼は不詳だが、直前の69（81と重複）は土佐の波川宗巴に以月の号を与えたものであり、あるいはこの人物と関係があるのかも知れない。大黒氏は長宗我部氏の一族とされる。²¹その当主の子が策彦の弟子となり、長宗我部家中の要望の斡旋を行なっていることが見てとれる。『鹿苑院公文帳』には天正九年六月二日に景德寺の公帖を得た玉汝周琳という人物が見え、系字を勘案すれば玉汝琳公はこの人物にあてられよう。97・98は天正六年七月一六日に土佐の久万俊宗とその室に道号法諱を与えたもの。こち

らは俊宗の子俊家の請によるもので、仲介者の名は見えないが、同じく玉汝の斡旋による可能性もあろう。

90 a・bは天正五年五月に對馬長寿寺の景轍輻公が詩を送ってきたのに和したものである。長寿寺は不明だが、景轍輻公は天文一六年度船で從僧を務めた景轍宗輻であろう。天文一九年（一五五〇）に帰国してから二五年余、晩年に至るまで交流が続いていたことがうかがえる。

周知のように策彦は天文八年度船では副使、天文一六年度船では正使を務めた。この二度の遣明船は大内氏の独占経営になる。天文八年度船は天文七年春に一度出航したが風を得られず博多に引き返し翌年春に渡明した。策彦はこの風待ちの間に月渚英乗に代わって副使に任じられ、北京まで赴き、同一〇年七月末山口に帰着、ついで八月安芸出陣中の大内義隆の元に赴いて復命し、次回遣明船の正使を拜命した。天文一六年度船は天文一六年三月に博多を出船、同一九年六月中には帰国したものとみられる。⁽²²⁾前述の通り本書後半部の多くは、この遣明船搭乗前後に山口に滞在していた際に作成されたことが確認できる。

自伝によれば、策彦は天文六年二月、大内氏の許に身を寄せ入明の命を受けた。6は離京に際し光夫馨恩が催した送行会で、策彦が詠んだもの。一方154は丁酉仲夏に策彦が「定林精廬」で「夢北野君」を題として詩会を催したことを伝えるが、この定林精廬は山口滞在中の策彦の居所であった定林寺と考えられ、天文六年五月にはすでに山口に到着していたことが確認される。

策彦が定林寺に滞在していたことは、137に香山（周防国清寺）の祐公なる人物が「定林僑房」に訪ねてきたとあることから判明する。当然定林寺の住持とは親しく、天文一〇年秋、策彦が無事に山口に帰着した際には住持は即日使僧を派遣して饅頭と酒を贈り、翌日には自ら訪ねてきている（『初渡集』嘉靖二〇年（天文一〇年）七月晦日・同八月朔条）。

14はその定林寺住持が催した詩会で策彦が詠んだもので、『初渡集』には「楓寺暮鐘」という詩題は記載されているが、詩本文を欠くものである（同年一〇月一二日条）。⁽²⁴⁾はこの詩会のあと酒を四、五行飲み、列席していた覚雄寺住持東明永果とともに法泉寺の楓を見に行つて即興で詠んだもの（同日条）。法泉寺は大内政弘の菩提寺で、大内盛見の菩提寺であった国清寺や大内館にもほど近い、山口の中心部にあった寺である。周防の定林寺としては秋穂の熊耳山定林寺が知られるが、詩会・酒盛をしたのち、その日のうちに、秋穂から二五kmほど離れた法泉寺まで紅葉を見に行くのは無理があるろう。一方法泉寺からは四kmほど離れた宮野にはかつて般若山定林寺があったとされ、⁽²⁶⁾そうだとすればこちらのほうが相応しいように思われる。

160、163は玉圃景敢・策彦周良・孤竹軒珠宣の三人でやりとりした応酬詩である。台風で居住の寺が損壊し気落ちしていると、策彦が見舞に駆けつけ慰めてくれたのを感謝して玉圃が詠んだ詩（160）、それに策彦が次韻した詩（161）、さらにそれに孤竹が次韻し（162）、それをうけて策彦が詠んだ詩（163）が続く。玉圃の居住寺院は161に龍翔禪刹と見えるが不詳、ただ161には「余偶以事停錫於防城」とあるからこれも周防の寺と確定される。年は「是歳七月之末」（160）「今茲秋七月」（161）のみあるが、孤竹は天文八年度船で策彦とともに入明し寧波で客死した⁽²⁷⁾ので、策彦・孤竹の二人がともに周防にいる七月は天文六年に限られる。

143はその孤竹軒を「桂子」を伴って訪ねたときのもの。『初渡集』には「孤竹」また「珠宣」とのみみられるので、「孤竹」が軒号であったことはここから初めて知られる。「桂子」は、角倉了以の父で医者として知られる吉田宗桂。天文八年度船とともに入明し、策彦に近侍して細々と用を足している様子が『初渡集』に見える。同席していた才伯は『初渡集』に「才伯盛上司」と見え、渡明前の博多滞在中にしばしば文

をやりとりしていることが確認される。

152は潤叔が詠んだ七言絶句の二八字を分解して各詩の最終文字として使い、二八首としたもの。もとの詩を復元すると「硯氷皚皚幾時融、筆未精神詩未工、若把才華比春色、人皆駿紫我痴紅、」となる。潤叔は『初渡集』に「得国清琴浦老并潤叔玉公侍史之書、」（天文八年三月一四日条）「国清老携覚雄寺主東明并潤叔玉公侍者、」（嘉靖二〇年八月朔条）など見え、渡明前の博多滞在中にしばしば文のやりとりをし、また策彦が副使の任を終え、山口に帰着した際にはいち早く見舞にやってくる人物である。「天戌灯宵」とあるが、天文戊年は天文七年もしくは一九年で、一九年正月には策彦は寧波にいるから、この詩の戯れは七月正月のことである。下向して数ヶ月、多くの山口の僧と交流を持っていたことが知られる。なお124・125の「寄琴甫」は右の「国清琴浦老」、国清寺の僧琴浦に寄せたものであろう。

155は祈禱に関わる筆記で、天文一一年二月一〇日付である。『初渡集』は嘉靖二〇年（天文一〇年）一〇月二六日を以て終了しており、策彦がいつ帰洛したのかは明確でない。ただ『鹿苑日録』から天文一二年二月には在洛していたことが確認され、また『厳島野坂文書』には大内氏奉行入弘中正長が厳島神社の社家棚守房頭に宛て、策彦が上洛途上に同社宝蔵内の法華経拜観を希望しているので便宜を図るよう依頼した卯月一日付の書状が残る。ここからすれば策彦の帰洛は天文一一年夏頃となり、155は山口で催された法会に関わるものと確定される。

一方、策彦が天文一六年度船搭乗のため再び大内領国へ下向した時期も明確でないが、これに関連しては140ならびに153が注目される。153は定林寺の蔵主を務めていた天英に、天文一五年正月に偈を与えたものである。かつて天英の号を与えたが改めて偈を求められたために執筆したとするもので、「遂出紙、需贅拙偈」とあることから対面の出来事と解せ

られ、ここから策彦は天文一五年正月には山口に到着していたと推定される。先述の通り定林寺は策彦が初渡時に滞在していた寺であるから、かつて与えたというのは初渡時のことであろう。

140は天文一四年一〇月に、叡公記室に杲叔の号を撰し偈を作つて与えたものである。叡公は不詳だが「香積派下」とあるから香積寺所縁の僧であろう。香積寺は大内義弘の菩提寺で開山は石屏子介、国清寺に隣接していた。これは人を介しての依頼であるので、必ずしも山口滞在中のこととは確定できないが、天文一五年正月に山口にいたのであれば、その二月前のこの偈もまた、山口での作成と解することもできようか。策彦は同年六月五日に博多承天寺で行われた聯句会に参加していたことが知られるから、³⁰以上から天文一四年冬までに山口に下向し、正月を山口で過ごした後、同一五年夏までに博多に移動していたと、その足どりを追うことが出来る。

天文八年度船時の日次記である『初渡集』は、天文七年七月博多へ戻ってきたところから始まり、同一〇年一〇月復命を終え安芸から山口に戻ってきたところで終了する。天文一六年度船時の日次記である『再渡集』は、嘉靖二六年（天文二六年）一月、舟山に滞留していた日々から始まり、寧波を経て上京し、帰路山東まで戻ってきたところまでの部分しか残らない。『謙斎雜稿』は遣明船以後の策彦の活動の一端を垣間見られるものであるとともに、遣明船搭乗前後の策彦の消息がうかがえるという意味でも貴重な記録なのである。

注

- (1) 『大日本仏教全書』遊方伝叢書四（仏書刊行会、一九二二年）、『牧田諦亮著作集第五卷』（臨川書店、二〇一六年、初出一九五九年）。なお全体像については村井章介他編『日明関係史研究入門』（勉誠出版、二

〇一五年）六三〜六五頁表1参照。

- (2) 「策彦和尚略伝」（東京大学史料編纂所架蔵写真帳「妙智院所蔵史料」一所収）、「前住円覚策彦良禪師行実」（静嘉堂文庫所蔵「策彦和尚入唐雜録」所収）。
- (3) 詩集・南遊集ともに三二種のうち。東京大学史料編纂所架蔵写真帳「妙智院所蔵史料」八所収。また岡本真・須田牧子「天龍寺妙智院所蔵『謙斎南遊集』（東京大学史料編纂所紀要）三二、二〇二一年）。
- (4) 『初渡集』（東京大学史料編纂所架蔵写真帳「妙智院所蔵史料」一一・一二所収）。『再渡集』（同）一三所収）。
- (5) 国立公文書館内閣文庫所蔵。請求番号は特〇六〇一〇〇〇六。
- (6) 本稿では『大日本仏教全書』所収本を参照した。
- (7) 詳細は『日明関係史研究入門』（前掲注1書）六三〜六五頁参照。
- (8) 妙智院に規宗知蔵のために揮毫したものが残るほか、早稲田大学附属図書館・駒澤大学禅文化歴史博物館にも所蔵され、また小松茂美編『日本書蹟大鑑』第一〇巻（講談社、一九七八年）一一六頁にも掲載がある。
- (9) 大石利雄「策彦周良の画賛をめぐって（その一）」（造形芸術学・演劇学）一、一九九六年）。うち『謙斎雜稿』に賛が確認できるものとして九点が指摘されている。
- (10) 11は「山梨県史」文化財編四二三頁、29は高橋範子「万里集九周辺の画事について」（鹿島美術研究年報第一七号別冊）、二〇〇〇年）図九、39は『愛知県史』別編文化財2絵画六七三頁、42は東京芸術大学大学美術館・読売新聞社編『雪村』（二〇一七年）図一〇三。なお現蔵は不明だが著29「渡唐天神図」に添えられる画賛は25にあたる（冷泉子爵家及某家書画器物展観入札）大正七年（二月）。
- (11) 『蜀山余録』巻上（浜田義一郎他編『大田南畝全集』第一〇巻（岩波書店、一九八六年）所収）。
- (12) <http://www.muse.pref.tochigi.lg.jp/exhibition/theme/2023sekkou-syou/index.html>（二〇二五年八月二八日閲覧、以下同）。
- (13) 伊藤幸司氏の「ご教示による。なおこれは東京国立博物館所蔵ガラス乾板D31879に写されているものと同一で（https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta/pub/G000002070607HP_31879/）、大石論文で著26としてリストアップされているものにあたる。「靈照女図」についてはこのほか68が添えられたものが以前Yahooオークションに出品されていたことが確認される（<https://auctions.yahoo.co.jp/auction/r1125982324>）。
- (14) 古川攝一「策彦周良賛「金山寺図」（『大和文華』一二八、二〇一五年）。
- (15) 44は京都国立博物館編『探幽縮図』下（同朋舎出版、一九八一年）所収「仏像祖師仙人花鳥獸画冊」のうち。71は文人画研究所編・藪本莊五郎発行『探幽縮図』（一九八六年）所収「人物山水図巻」のうち。85は『白鶴帖』第三冊上（東京大学総合図書館所蔵）所収。
- (16) 小松茂美編『日本書蹟大鑑』第一〇巻（前掲注8書）一一四頁。
- (17) 妙智院所蔵『謙斎詩集』による。『続群書類従』（続群書類従完成会）第一三輯下所収『策彦和尚詩集』は末尾に「右策彦和尚詩集以浅草文庫本補之」と注記があるものの、妙智院所蔵『謙斎詩集』に比して後半部が欠落しており、この部分は欠けている部分にあたる。
- (18) 遠藤珠紀・宮崎肇・金子拓「宣教卿記」天正三年正月〜五月記」（『早稲田大学図書館紀要』六六、二〇一九年）、同「宣教卿記」天正三年六月〜二月記」（同）六七、二〇二〇年）。
- (19) 関連して山本大「長宗我部元親の画像と雪隠寺」（『日本歴史』一八〇、一九六三年）も参照。
- (20) 妙智院所蔵『謙斎詩集』による。なお『続群書類従』第一三輯下所収『策彦和尚詩集』は「萱親也」以降を欠いている。
- (21) 山本大前掲注19論文、同「長宗我部元親」（吉川弘文館、一九六〇年）など。
- (22) 『初渡集』『再渡集』、また『大明譜』（岡本真・須田牧子「天龍寺妙智院所蔵『大明譜』（東京大学史料編纂所紀要）三〇、二〇二〇年）、『嘉靖二九年五月一日浙江省船舶提挙司示』（大庭脩「芳洲文庫の『嘉靖公牘集』について」（同）『古代中世における日中関係の研究』同朋舎出版、一九九六年）所収『嘉靖公牘集』一八号文書）による。
- (23) 『初渡集』嘉靖一八年八月一日条に草稿が記され、また『策彦和尚

行実』（東京大学史料編纂所架蔵写真帳『妙智院所蔵史料』一）に元龜四年四月一六日の年紀を持つ、ほぼ同文の文章が収められている（須田牧子「妙智院所蔵『初渡集』中解題」『中島楽章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院、二〇一三年』三八〇頁）。

(24) 玉村竹二『五山禅林宗派図』（思文閣出版、一九八五年）二二八頁。

「東明和尚遺像讚」（相国寺瑞春院所蔵『縷氷集』天）によれば、塩冶佐々木氏の出身で南禅寺に出世、永祿四年（一五六二）七月一日六八歳で寂、足利学校で学び、また大内氏の外護を受け周防の覚雄寺に住したという。覚雄寺は山口の糸米にあった寺（山口県文書館編・発行『防長風土注進案』第一三卷二一〜二二頁）。

(25) 『防長風土注進案』第一四卷三二四頁。

(26) 嘯岳鼎虎が元龜二年（一五七二）に作成した「蓬萊山説」（『嘯岳鼎虎禅師語録』所収）には、杉重良の先祖が無著（無著妙融カ）を開山として「防城」に般若山定林寺を建立したが兵火にかかったこと、同元年に杉重良が同寺を長門国厚東郡万倉郷に移して再建したことが記されている。「防長風土注進案」舟木宰判万倉村蓬萊山天龍寺項（第一五卷二一三頁）に収録される同寺の縁起では、この「蓬萊山説」を引用し、「防城」を山口宮野村としている。

(27) 『初渡集』嘉靖一八年閏七月八日条。

(28) 孤竹が珠宣であることは『初渡集』嘉靖一八年五月一日条参照。

(29) 『鹿苑日録』天文一二年二月九日条、「巖島野坂文書」一五七号（『広島県史』古代中世資料編Ⅱ）。岡本真「戦国期日本の対明関係」（吉川弘文館、二〇二二年）一一〇頁参照。

(30) 岡本真「宮内庁書陵部所蔵『聯句』にみる策彦周良の周辺」（『市史研究』）「究ふくおか」一八、二〇二三年）。

【付記】本稿はJSPSS科研費17K03058・25K00493の研究成果の一部である。末筆ながら翻刻をご許可くださった妙智院に住職島見周隆氏にあつく御礼申し上げます。

【凡例】

- ・底本には天龍寺妙智院所蔵本を用いた。
- ・作品（メモ等を含む）には便宜通し番号を付した。ひとつの詩題・詩序が二首以上にかかる場合は、各首に小番号としてアルファベットを付した。
- ・原則として、漢字は常用漢字を用いた。「餘」「余」「裡」「裏」「竜」「龍」はママとした。略字はママとし、本字を校訂注として付した。校訂注は「 」で括って示した。
- ・予・余などの自称の小字は通常の大きさと起こした。闕字・平出・擡頭は適宜存した。
- ・合点・朱合点・朱点・朱圈点・朱線・朱の△記号は略した。墨の○△等の記号、また傍訓はママとした。ただし引き出し線を用いて文字の入替を行っているものについては入替後の形で示し、挿入符・傍記等による挿入箇所は本文中に追い込みとした。朱字は『 』で示した。
- ・虫食等による判読不能文字は□、または文字数をはかって で示した。丁替は「 」（1丁表）・「 」（1丁裏）のように示した。
- ・原則として、詩は四句目・七句目で改行した。また詩題・詩序・詩末の補記は二字下げに統一し、詩題と詩序が併記される場合は詩題のみを二字下げとした。結句の後に詩題が来る時は、句末より五字下げに統一した。また年紀署名は本文より三字下げとした。
- ・説明注は（ ）で括って傍記した。年紀には西暦を付し、寺名には所在地を旧国旧郡に拠って付した。ただし京都市内の寺はこれを略した。山号には寺名を付した。人名には、忌日供養や死没を悼む内容の場合に限り、判明する限りにおいて死没年月日を記した。
- ・その他、説明を要する点は○を付して割注とした。

20 失犢婦牛信脚行、迢々野徑綠蕪平、牧童不見在何処、

知入深村喚祭声、野徑婦牛〔圖〕南禪真觀不上小師請之

21 期君勤得讀書功、時習魯論晞馬融、絳帳他年定開講、

灯花夜々对残紅、〔蘇軾〕 岡公髫年試筆之和岡公時讀〔論語〕

22 一別天涯懷子由、履穿笠破瘴茆秋、彭城夜与蛮村夕、

旧雨声歡今雨愁、〔蘇軾〕 笠履東坡〔圖〕南禪真觀小師真首座 〔請〕 ○2

23 千里同風天一、中華何敢隔扶桑、南詢婦去無餘事、

手裡梅花依旧香、〔蘇軾〕 嗅梅天神贊入唐圖、妙心想首座乞之、〔濃州人〕

24 惟雲字說

昔、靈鷲祖翁、油然興脩多之雲、沛然大法之雨、等持也文便也、
毫光也肉髻也、其餘慶太夥矣、焦牙敗種、及蠢々品類、靡弗沐其
沢、何其快哉、于后香至季子碧瞳開士、不遠十万里程、出五竺之
雲、入中崧之雲、々気冉冉、度九白之墻、遂触可師五峯之頂、膚寸
而起、邇徠、尋金枝摘玉葉者、不知其幾多、凡雲之為物、縉氏官
焉、魯公書焉、芒碭之氣、赤漢以之勃興、蓬萊之色、李唐以之全
盛、其祥瑞不遑枚舉也、弘安年中、〔無學祖元〕 仏光老国師、帶凌霄雲、得々
來本朝、於是、仏光々明雲、飛騰仏国乾坤、吾雲〔愛宕峯石〕 居帝師、夢雲連疎
山、而鬢鬣無幾、承、〔高峰顯日〕 仏国々師、以覆蔭后昆、絶海禪匠、其衝樓
跨竈、而躡五台山上雲、亦復嚮扶桑一国師、大哉至哉、今茲秋之
仲、小友琛甫丈持栴來、伝紹介之、言曰、土陽長林精廬有佳少、臻其
〔津野勝興〕 諱、願翁輒字之、且作説以見還、則何幸加焉、予因問俗譜則、津野
氏華胄也、問其師承則、絶海○2 国師之雲仍而前南禪、〔瑞光〕 旭岑和尚
之寧馨也、予壯歲与、和尚忝識荆之好、蓋、佳少有雲恋故岑之意、
彼此豈可嶮拒乎、仍以惟雲副焉、仄聞、佳少近將觀光上国、過籍
〔矣龍寺〕 吾山、今也、佳少王筠賦紅藥之妙齡也、前程不易測、它時異日倘
能内師仏祖跡、外弄文章雲、以波瀾老成、則它時異日、雲興八部登

龍三級者、可拭目而誤矣、然則天瑞有五色、人瑞有仁表云者、風斯
在下乎、是予所以規祝之不淺也、惟雲々々勉旃、
〔五八〕 永祿五歲々舍壬戌中宵前三日

前臨川策彦老拙周良書于城西草堂

25 北野神祠春不別、南方仏法月無迎、同床一夢徑山夜、

贏得梅香失睡眠、〔入〕 唐天神贊

26 咲破虚空遊市鄽、錯令人喚掣風顛、布囊一担重多少、

中有百千兜率天、〔布〕 袋

27 △出岫無心到处家、斯須千變一天涯、縱為方丈曼陀雨、

莫散加沙角上花、〔雲〕 室〔右〕 宝林〔龍〕 慈〔蜀〕 尼、〔入〕 ○3

28 棲処高哉十八公、却嫌野雀上来同、鳥窠不上縱重出、

若遇斯郎立下風、〔巢〕 松

29 仏法何曾夢見之、大唐国裡本無師、阿誰会此南來意、

問著梅花亦不知、〔入〕 唐天神贊

30 乱裡為無心愛楓、雄山々々下路難通、林間煖酒曾遊寺、

今日煎茶燒落紅、〔乱〕 中遊高雄

31 ○寺在城西々々更西、愛楓好是卜幽栖、晚風錦上舖花去、

冬日如春意轉迷、〔同〕 上

32 白桜落後緑陰加、古寺鐘疎夕照斜、春縱不來非可恨、

能因一詠四時花、〔神〕 遊 〔題〕 金竜寺 〔津島上郡〕

33 任他春色去無蹤、花在能因名下濃、以一首歌鳴百世、

金竜寺裡夕陽鐘、〔又〕

34 維時孟秋之杪、殘熱猶酷矣、於是、

竹園禪宮忝賜团扇一柄、何榮加焉、欽綴卑作者二絶、非敢備

尊覽、聊抽衷情之万乙云、

a 偶領团扇出深宮、豈与凡間用捨同、我有二天婦掌握、○3

寒招舜日熱荒風（姚重華）伊邪放敷

b 非菴尋常官扇材、一團清氣隔塵埃、人間殘暑不推去、
中有恩風天上来、

35 忽開法窟降魔宮、比叡名高日本東、逢水迎僧話梅月、
慕山中相聽松風、野桃春淺城晨鐘夕聲枕無夢、雲棟雨簾詩有功、
縱是江鷗來結社、一閑未必若吾翁、

右、次蒯菴老人之韻、（近江滋賀郡、于時菴在湖西井室、）

36 天下叢林唯一翁、声名压倒躡兼嵩、十三刹界現華藏、
五百丈枝支月宮、終日講筵鐘殷々、每朝法会鼓隆隆々、
野桃春淺城西寺、不知幾時尋小紅、

次月舟禾上次歲初之韻（韻）

37 曾無隱逸避風塵、奈此佳山佳水滨、好極幽探遊絕境、
停橈兩客定詩人、（建上寺）扇面山水

38 洛東之福聚派下 玉雲主盟瓚公座元、价于楮兒、見雷雅称、々
以南叟、仍書二大字於厥上、係一伽陀於其下云、

不借尋常長養功、老盧過嶺振宗風、庭前有箇孫枝在、
古柏參天百廿翁、（*）

39 夢裡明々頓契機、遠超洋海扣禪扉、只將一朵小梅藥、
換得万年符印帰、（入唐天神）

40 吟忍炎蒸到夕曛、檐頭繫得隴頭雲、々仍只自可怡悅、
縱作奇峯争贈君、（劉邦）夏雲多奇峯（天用末上出題、）

41 雲到劉家始見功、芒碭氣不屈秦宮、覆藏百二山河后、
飛入新豊樹色中、（同代榜也）

42 凌霄峯下白雲衢、夢裡尋師称蠹徒、試問梅花々の答、
烏頭毒葉勝醍醐、（入唐天神）

43 遠登徑塢謁禪魁、夢裡明々伝印回、北野神祠祭如在、

詩人千載拜靈梅、

44 上世穢皇惟德馨、靈苗毒藥辨畦町、由來換骨頤神術、
收入禪林本草経、（同）神農像之贊（唯高妙安）

45 慧阜補天日之翌、携一二同游而造詣鞍馬北寺、蓋平素深信根
也、於是乎、和尙有尊作而（韻九）ウカ擬感応篇、且見祝其遠大、予
亦忝受統紹之命、弗省瓦礫在後之謂、勉強附韻尾者両首、一以
奉応 和尚命意之厚、一以代 雅伯上馬盃云爾、

a 鞍馬三寅同一時、藏人于以仰瞻之、万春富貴不貪宝、
開 大智花過舍梨、

b 嶮韻難攀経幾時、七盤山路太多之、吟鞍馬上鞭其後、
罰酒争禁太白梨、（謙齋拙衲周良拜稿）

46 夢中万里往敲扉、徑塢上方連翠微、当甚一枝頭仏法、
将梅香換桂香帰、（入唐天神贊）塞龍山座元之謂、（天桂末上之詞、）

47 漫遊向外誤区々、仏法南方只箇無、夢裡分明覺胡越、
梅花依旧鬢虛都、（同）未受用（天正六戊寅三月廿九）

48 菊有延年名不空、早菊争如晚菊濃、重陽展却小春風、
誰移月窟（*）、（*）

49 菊有延年名不空、重陽展却小春風、誰移月窟姮娥草、
收入長生藥籙中、（菊）延年（菊）會于半井（光成）園亭（有菊）

50 仲秋題松月軒
節迫中秋遊興多、庭前松樹夜如何、除吾十客九佳作、
半愧蒼官半素娥、

51 江雨霏々半成雪、風吹柳絮暮春天、（○）前後、余日アリ、
入麴垂隻手、笑叫掣風顛、皤腹虽方寸、

52 中容兜率千、
右、捫腹布袋之贊、（養三井仏城坊之謂、）

53 △雲如軒（近江栗太郎）（景隆） 瀬田山岡美作守諱之、三井三光院价、同年同日、

54 △丁 萱親友室良益禪定尼年諱、燒香之次、聊綴一祇夜、供牌前

云爾、

別來六十四年先、光景（雖）虽遷物不遷、始叫生天黃檗母、

誰知心月本孤円、

元龜癸酉蒲月七日 前円覺策彦叟（四年一五七三） *○。

55 東超海漠救迷情、万里長江一葦橫、他鬼眼睛光輓々、

眇觀武帝大梁城、

渡江達磨贊（論包）

56 湖邊吹雨山辺雪、天巧円成両画屏、（蘇軾） 於坂本（近江滋賀郡）

風水洞辺溪徇橫、蘇公遠（蘇軾）送李公行、東君有意浮梅萼、

先使人知勞待情、

右、李節推待東坡図、為（蘇軾）

泉南怡公侍史、

58 ○靈照女贊（龐參）

△龐老下床如改容、終焉時節太龍鐘、湘江未蕩家財先、

截断衆流此女鋒、（一〇）

詠酒中趣（一五七三） 天正元某月、泉南酒、主人請之、

59 拳酒銷憂終日閑、君家葉訣足留顏、（某云） 駐顏ヲ留顏ト東坡カシクツ、

別有醉鄉非世間、

60 櫻花

魏紫姚黃蔑以加、山桜紅白雪交霞、倩誰誇說中華去、

日本不名唯此花、

楓

61 愛酒愛楓忘世艱、林間恰似坐花間、主人独酌非無伴、

霜葉吹紅亦醉顏、

62 菊 澆巾（陶潜）元亮对黄菊、落帽孟嘉耽碧香、聽否園中胡蝶叫、

傾盃日々は重陽、

雪（一〇） *○。

63 对雪樽疊惟德馨、寒餘臍味可延齡、此心恐出孫康上、

不説儒經説酒經、

茶

64 無何日飲旧家風、一点未曾論世功、若累茶盃消酒渴、

三千尺瀑在胸中、

楷法

65 書名遠播庄諸方、早歲中年知幾行、酒後縱橫筆飛処、

半成醉素半顛張、（懷素）（張旭）

白鷗

66 景致元無如水頭、相攸拞地下居不、春声撲攏近聽好、

南狎江鷗西海鷗、（一〇）

靈照女贊（二五七四） 天正二年甲戌春、応信長公之命、同時贊二條、

67 a 半文声価重千鈞、四仏之中独露身、心月孤円無影像、

両花本自一花春、（万象之中独露身、古句）

又

b 商量不論方兄直、交易全旌些子功、竹漉篔中貯何物、（籬）

半盛明月半清風、

68 △靈照女贊（二五七五） 天正三乙亥霜月、塞工藤新左衛門之請、

由來家富合榮々、販竹漉篔纔養生、（籬） 老父（一〇） 祇言靈照女、

故交未忘孔方兄、

△以月之号

69 △不干天上陰晴變、何在世間明暗頭、本自円（成）□点無欠、

八窓夜々は中秋、
（波川） 以月宗巴、（土陽） 泉南人事、

70 △繞屋無端十八公、半聽雨々半風々、百千雷吼一淵黙、

三万獅床方丈中、
松室 理泉苾芻尼請、（玉汝周琳） 玉汝琳藏主价、

71 △遠超海漠歷多艱、錯已錯人梁魏間、大小達磨元字脚、

空留隻履又西還、

右、達磨贊、（松田与三） 山崎某人請焉、

72 淨光坊 木綿一端『返銀了、』（愛宕山）「（ウ）」⁸

休室（七十六歳）

73 參得真珠撤帳意、勘過主杖靠床機、淨名方丈容座夥、

龐老（龐老）心空及第婦、

土陽秦氏大黒作州太守之第二子玉汝琳公知藏、觀光以來、寄九
（玉汝周琳） 研於予会裡者有年于茲矣、以故一日就予為 賢考求法諱并道

称、不獲驗拒、立之曰宗徹、曰休室、仍綴禪詩以為將來之左証、
（二五七五） 天正三年乙亥

74 土州人事、吉松備後守、寄楮子該需法諱別号、紹价乃予門生玉
汝琳公也、不克却之、諱以紹玄、字以実參、仍書二大字之次、

一祇夜（茂景カ）「（ウ）」重宣其義云、

75 天正四稔正月廿二日、（一五七六） 奥丹波周興来、望藏主転位、彼僧是丹之

口郡広徳寺之門派也云々、携以脇指一并皆朱小香合、
（天正四年） 同年仲春之杪、東福寺梅墅軒月溪澄首座、以事赴豊州、（豊後） 因請送

行詩、々云、

天涯君去幾時回、立尽洛橋春水隈、新柳未糸難繫別、

贈行二月一枝梅、
（東福寺） 惠峯月溪座元、以事暫得豊州之行、此雖云暫別、（豊後） 無惻々（情）□、小

詩以代贈云爾、（聖徳）「（ウ）」⁹

77 信衣何敢足争之、一任道明上坐追、春到黄梅雖不別、

南枝太早北枝遲、
即宗之号諱題、

78 題金竜寺（撰清島上郡）天正四年丙子三月十五日、

桜雪映山々更奇、寺楼鐘色夕陽移、
（橋水徳） 能因妙語驚人後、

花可羞題我惡詩、

79 竜王水

暮色出花々外鐘、此時此景罕遭逢、山桜浸顔岩間水、

昨日金竜今白龍、（ウ）「（ウ）」¹⁰

80 上世炎皇惟徳馨、靈苗毒藥辨畦町、吾家別有願神術、

收入禪林本草經、
炎帝之贊

81 土陽人事、波河羽州太守、法諱宗巴、一日遠寄明牋而斬別称、
輒副以々月之両字、禪詩一篇証之云爾、
（在） 不干天上陰晴变、何在世間明暗頭、本自（四）□成点無欠、

八窓夜々是中秋、

82 待郭公
（夢想） 天正四夏、

なかくてなる雨の夕への郭公山田のしつの独きくらん、

83 都あたりまつにつれなき郭公山すみの身や初音きくらし、（ウ）「（ウ）」¹⁰

84 岡松野梅路、挫雉俊鷹雄、彩羽触金爪、

命軽一顧中、
俊鷹挫雉（天正四丙子小春）

85 三友過橋笑一場、廬山静処却忙々、溪童相顧話何事、

中有老僧醒亦狂、
三笑（因）□（新甫請）

86 屏風一双之画賛

六出半晴連四郊、嚴寒哨々仲冬交、点無凍蝶恋霜菊、

只有幽禽立雪梢、

a 或顧風枝或就眠、一双凍雀酷堪憐、縦寒難忍少留宿、

日落霜筠雪竹迎、

b

日落霜筠雪竹迎、

- c 雄舞晴空雌憩枝、春閑燕子日長時、柳風著意繫留景、
線去糸來細々吹、○¹¹
- d 數夜離離群一隻鷄、野蹊換得旧時栖、草如茵処堪雌伏、
求乳衆雛待母啼、○¹¹
- e 映竹夫容帶露斜、枝頭幽鳥口吧々、人心羽族風流遠、
貪看飛虫不見花、○¹¹
- f 露香繁々無名草、春色濃々称意紅、可咲螳螂恃長臂、
命輕靈狗一吞中、
- g 誰入春門慕故侯、因懷瓜地避羸劉、雨餘圃老無人護、
野鼠飢來一任偷、（劉邦）
- h 輒盼三春已作空、可憐獨鳥怨天工、尽情恋々如求友、
放一声々竹樹風、
- i 草徑無媒絕履痕、荒鷄何意獨窺園、昔曾舐鼎登仙否、
試問桃花笑不言、○¹¹
- j 藻底潛鱗解辟邪、翠禽影落水之涯、閑居眠藕計何事、
心在窺魚不在花、
- k 一鳩鳴午一鳩休、古樹々腰俱戢頭、俗耳砑針黃鳥外、
春來十雨九生愁、
- l 晚梅二月殿芳辰、幽鳥喃々似訴人、宜避此君不平意、
一声啼破數株春、（戀）
- 87 △贊杜甫象（像）
千古詩人立下風、唐朝独歩浣花翁、天令遺像消遺恨、
窮尽扶桑東復東、○¹²
- 88 五月牡丹風亦薰、又如吐藥媚東君、花色春後千金価、
人再來難当半文、（五年）
五月牡丹（天正丁丑五月日）
- 89 復越亡具不久居、孤舟帰去勝郷闕、五湖煙景万鍾富、
- 90 a 名遂功成楽有餘、（因）
范蠡泛五湖（長逸）三好日向入道之求、
b 非畜書來慰暮顔、且添華席伴清閑、欲綴野詩伸寸謝、
日曆如山々外山、（又）
- 91 百尺築成劉表台、歌殘一曲野鷹來、海青威氣压凡羽、
鉤爪劍翎俊逸才、（鷹）
鷹（塞落合詞、玖首座价）
- 92 △天正五稔丁丑八月二十八日、理中周料監寺十三回忌、其徒瑛監（周瑛力）
寺於臨川宮弁齋筵、半齋供養一堂之衆、予燒香、
- 93 △同年霜月七日陽春、々耀榮公首座七年諱、（欠）
△（欠）清芳院殿春天東一大姉大祥忌、（柳原資定案、天正三年五月日没）
- 94 從伝衣鉢無縫印、高叫冠巾和尚（伯耆）來、更有画工不工処、
唯凶影像欠松梅、（欠）
△（欠）東帶天神之贊無松梅、（二五七〇）
天正六月十三日、養花（伯耆）
- 95 顏回像贊 天正六月、楠長庵求、（正庵）
孔門弟子孰尤親、十哲科中第一人、北巷虽寒楽無極、（雖）
四時意足否壇春、○¹³
- 96 土陽人事、久万豊州太守、其令似得々遠來、為 貴考見需法諱
并道称、実誠志之至、可嘉尚矣、輒曰宗孝、日源甫、本于孝、
為百行源之語者乎、禪詩一篇、為將來之証、
- 97 百川帰海絶纖塵、準擬濫觴始自珉、争若曹溪一滴々、

溢成濟水定要津、（二五七心）
天正六年七月十六日、

98 土州人久万次郎左衛門尉、為 萱親乞法諱与徽号、々以妙欣惟

霖、仍大其書之次、綴一祇夜係于其下云爾、同上、

太早雲霓蘇濁石、之乎者也更難酬、驕陽改變為驕雨、

天下蒼生從此秋、（一〇七）
ウ

99 奉送 規岳老禪見還粉鄉此老禪乃関山派之僧也、九年先電暗、今又来、

偶結宗盟纔一年、交虽日浅意深然、兩鄉千里俄分袂、

早晚重談文字禪、此送行詩、因乱燒失、重書以写之、携以白布、天正六寅七月廿有三、

託此便、稻葉似扇一鉄江遺書札、（長通）

緬懷仙女乘雲古、（余曰其、
十六日御起身、

101 天正戊申小春、（道澄）
十六日御起身、聖護門主以事 軫発東軫、予今耄年、不能靡

惻々之憂、謹綴小律、以奉洩离曠之卑懷云、

洛橋立尽約婦期、万里東^{ニスラ}轅天一涯、霜柳無糸小春浅、

贈行聊以早梅枝、

102 小春十有三日、（道澄）聖護門主光許、殊見 倭哥二首、蓋楓葉之哥（歌）

也、予翌日遣顔也、言昨日光臨之謝之次、野章一首奉獻、

謹呈村体一章、以奉謝日昨之光許、情見于詞、伏希 榮擲、

嵐寺蕭条独对楓、屈駕不意間衰躬、天心是待停車愛、

霜葉吹残秋遊風、（一〇四）
ウ

古人云、十月小春、一年好景、（果集）
〇九蓋感霜葉紅於花之時之謂乎、

天正小春過半之頃、（謝庵考）
（天正六年）
今茲天寅

陽明殿下偶停 高馭於小倉山寺、以見坐愛丹楓、可謂追媿 宸

遊故事也矣、予平素時々陪侍于 鈞座之側者稔矣、今也聞此

台遊而豈可默而止乎、謹呈上野律一章、以奉抒卑忱之万乙云爾、

a 紅葉徒来属小倉、緬懷曾擅 御遊場、楓^雖虽秋後期 台覽、

錦上添花昨夜霜、（一〇五）
オ

b 君か情の色をそへつ、（近衛）
前久

c 若御所様 ことのはのなさけのいろハをちこちの

木々のもみちもえやハおよはん

△（龍居士贊）
（近衛）
信基

△（龍居士贊）

此郎相見馬師後、匹耐叫心空状元、蕩尽家財更一宝、

月穿湘水々無痕、（蘇賦）

想見東坡旧居士、

斫開南岳好峯巒、（蘇賦）
（二五七心）
禪林十

106 元龜二稔鞠月十有二日、（觀）
ウ睿山嬰兵燹、三院一炬焦土矣、慨嘆之

餘、綴以八、以記焉、

法衰比睿大中堂、嘆息丙災焦上蒼、天子願輪懸日月、

山王權現歷星霜、湯温廿四郡湖水、灰冷三千刹道場、

曾有白鬚神託在、七^{カヒミル}看東海^{シラレコトヲ}變、為^レ桑、

入唐天神贊

107 仏祖元来総不知、（知）何須為法赴天涯、只將四百餘州鉄、

鑄出梅花春一枝、（一〇六）
オ

天正七稔卯正月二十日

奉贊

慧峯天倫尊侍試春之芳韻

108 風光先自履端催、春色新從筆下来、他歲期君德香遠、

木蘭元是不名梅、（東福寺）
（光沢）
（兼彦）龜陰周良拜稿

叨奉塵

109

（建仁寺）
東山劍甫佳少試穎之草什 同年正月之杪、彭藏主之新風、
一自 君詩落手來、和篇漸被雨相催、影香句有薔薇論、
好向東山評品梅、

110 △海雲生岳面、山月落塔前、古句、

111 フモトニハ千里ノ浪ヲカクシイテ枕ノ下ニ有明月（慈鎮未尚、〔歌〕） （近江滋賀郡） ウ〇16

112 天正七己卯々月二日、釈迦堂本願上人价、差樟一荷、豆腐以下持參、
播陽喜多村与三左衛門尉、法諱宗忠、一日寄明牋雷道称、々以勲

叔、輒大其書、以塞其請云、

113 △無為真人現面門、智惠愚痴通般若、靈光分明輝大千、

神鬼何処著手脚、 洞下道元老古錐贊

114 鍾虺

115 『○天正七稔己卯々月十四日、初聞（カンコトトリ）之聲、在風山、
同年卯月十四之曉、初聞杜宇於枕上、』

116 『晋 文公謫則謫、（唐文粹、可重考）

（孟子）
孟子醇乎醇、』

117 △仏愛我亦愛、清香蝶不偷、一般奇絶処、不上婦人頭、（鄭谷、蓮）

118 『統臨洛泉、可覓、』（広録）

119 竹筧引泉声滴々、松窓来月影遅々、（中峯「泉」オ〇17）
天正七年己卯々月十六日、（今日、出石倉之普請）但馬垣屋方来、于時在臨川寺前而对

面、携以一緡、

121 同十七日、得肥前得徹首座之書、惠以唐墨一挺、其門下之二僧
来、一名碩寛、（位首座、其年四十九）携以黄麈、一名知賢、（位藏主）惠以沈香

一両、

122 △同十八日、昨夢齋之子息 来賀、携參百疋、蓋齋名之礼云々、

（余白）
料知菊後費君吟、節去蜂愁院落深、天恐風光都断絶、
又吹秋雨入楓林、 菊後遇雨
薄暮扣門驚睡誰、遠勞書信碧雲師、怪来三日香吾口、
蘇合甘松家法詩、 寄琴甫
四海禪林主是誰、大唐日本総無師、欲知臨濟正宗旨、
參取吳江楓落詩、 同
争比人間掣電歎、七宵長有二星残、銀河并按黄河帶、
水縦雖枯盟不寒、 織女契久 野积周良（業彦）
天為牛郎通好不、西風依旧旧風流、一宵便作万年計、
烏鵲橋頭幾度秋、 同 代人
駐春紅葉似紅顔、年少叢辺転往還、今古雖花以人顯、（オ〇18）
三韓移在一庭間、 見高麗芍藥
紅葉花前作勝遊、滿庭風景幾風流、一枝消息春猶在、
莫道東君挽不留、 同 代人
秋樹色從霜后加、高人開宴暫留車、滿庭詩景似春意、
山寺丹楓城寺花、 見紅葉
夏鶯隔葉誤誰何、九十韶光一刹那、雖繞花中管絃断、
驚人緑語不須多、 黄鸝隔葉
对月幾回裁祝章、年々不改旧恩光、秋宵興勝春宵短、
好坐桂花飛羽觴、 寄月祝
聖代祇今罷獵遊、涼蟾暗々鹿呦々、不須驚起竄脩竹、
月照半弓深夜秋、 月前鹿 代人（ウ〇18）
金山古寺記吾曾、一葉扁舟兩度登、瓦鼎煎茶談到暮、

123 料知菊後費君吟、節去蜂愁院落深、天恐風光都断絶、
又吹秋雨入楓林、 菊後遇雨
薄暮扣門驚睡誰、遠勞書信碧雲師、怪来三日香吾口、
蘇合甘松家法詩、 寄琴甫
四海禪林主是誰、大唐日本総無師、欲知臨濟正宗旨、
參取吳江楓落詩、 同
争比人間掣電歎、七宵長有二星残、銀河并按黄河帶、
水縦雖枯盟不寒、 織女契久 野积周良（業彦）
天為牛郎通好不、西風依旧旧風流、一宵便作万年計、
烏鵲橋頭幾度秋、 同 代人
駐春紅葉似紅顔、年少叢辺転往還、今古雖花以人顯、（オ〇18）
三韓移在一庭間、 見高麗芍藥
紅葉花前作勝遊、滿庭風景幾風流、一枝消息春猶在、
莫道東君挽不留、 同 代人
秋樹色從霜后加、高人開宴暫留車、滿庭詩景似春意、
山寺丹楓城寺花、 見紅葉
夏鶯隔葉誤誰何、九十韶光一刹那、雖繞花中管絃断、
驚人緑語不須多、 黄鸝隔葉
对月幾回裁祝章、年々不改旧恩光、秋宵興勝春宵短、
好坐桂花飛羽觴、 寄月祝
聖代祇今罷獵遊、涼蟾暗々鹿呦々、不須驚起竄脩竹、
月照半弓深夜秋、 月前鹿 代人（ウ〇18）
金山古寺記吾曾、一葉扁舟兩度登、瓦鼎煎茶談到暮、

135 眼青頭白去年僧、再登金山寺南渡ノ内、謙齋南遊集、朝訪寒梅到暮鴉、初冬雪白小橫斜、南枝却晚北枝早、陰処猶多頃刻花、初雪問梅

136 六出初吹梅較遲、偶乘吟興問南枝、喜吾雪裡得春意、一点花如一字師、同

137 燒灯之夕○「燒灯」ノ右傍ニ、朱長方印アリ、香山祐公佳少、見枉華馭於定林僑房、予時有不意之事、不克拜迎、遺憾無措、謹贊○「試春之芳押、兼奉謝前度來訪云爾、」

138 花有名園德有隣、鄉談換尽覚情親、九夷不陋詩人屋、正与洛陽同此春、花下話洛

139 人是日迎吾野生、碧桃紅杏不関情、春來且喜聞新話、花裏尋師到洛城、同○「付三、」

140 香積派下瞰公記室、价人需雅称、々以杲叔、仍書二大字於其上、係一伽陀於其下云、○「香積」ノ右傍ニ、朱長方印アリ

141 招提佳境費新吟、鐘在暮樓楓在林、静向眼辺聴愈好、鯨音十杵九紅音、楓寺暮鐘

142 三月桃花輪一籌、作龍楓葉派飛流、赤梢不改銀河上、若比錦鱗風馬牛、楓葉化龍得牛之字、即鹿、

143 a 花有飄零人晦黯、殘紅葉底罕逢遭、三春晚似元嘉末、○「20、」餘看前朝一醉陶、樹底殘紅

b 九旬韶景八句塵、転盼紅稀又緑新、容易過牆旧時蝶、不知葉底有殘春、同

維時旧紅留春、新緑欲夏之頃、予偶携桂子訪孤竹軒主、々盟出迎一咲、遂挽袂快筵、以唱酬五十韻、既畢事將日歸、主盟予曰、今也雲破月来、殘花弄影、奈此良夜、何子豈無再吟乎、予与其言、而互賦樹底殘紅者數聯、実一時佳也、時才伯縉郎○「盛、」

在座、主盟為之置酒虛左矣、吁、雖曰慕蘭文章四友、有名而無実者、唯予与桂子而已、雖然于葭玉于鵬鷄、講交忘形者、蓋古今之○「20、」恒也、以故不省醜陋、卒走筆、以為后会起本云、

144 日暮風来積葉稠、殘僧擁帚立溪頭、只因搖落破閑味、不信青廬有白鷗、溪辺掃葉夕陽僧得鷗二字、怡雲子志○「謙齋周良、」

145 賦西都梅招洛之策彦禪伯在防州、一朶西飛春幾回、紫陽梅只洛陽梅、代花伝語郷人去、不改清香又待來、松塢元甫○「駿岳、」承天寺○「筑前那珂郡、」

146 攀高嶺、索千里一咲云、承天老師詩以見寄西都梅花遠信、卒奉

147 不論時節使春回、一律詩香九月梅、餘習愧吾勞遠夢、尋花西去又東來、怡齋周良拜頓○「21、」

148 霜葉斜澗澗水紅、神遊々遍雪生涯、自怪夏耶非夏耶、想可南人無此夢、見紅葉於玉泉寺、

149 十宵八九定楊花、暑夜夢雪、ヲル袖モ心ノ色ノ思種ナニノネサシニライシゲルラン○「湖心頓鼎、」

150 謹奉攀高歌芳韻、情見于詩、等檉拜々、相思託草至秋後、一茎不改青眼旧、無媒徑路今有媒、

何必与愁根争茂、
代

151 試筆

周道中興日、夏正三統春、自然知閏曆、紅入牡丹新、

（拾）（兼彦）
拾齋周良那リ方印」丁〇二四」アリ、

152 潤叔尊契有春首佳作、其唱高而寡和、其韻險而難攀、予戲分二

十八字、押之篇末、以作狂斐、蓋從志之所之而已、（推）咲擲推幸、

a 何夕往敲有花院、一歛未必如掣電、愁腸写得若寄君、

須弥吾筆海吾硯、

b 多君楷法有師承、下筆煙雲落剡藤、鉄画銀鉤何所似、

若非逸少便陽水、

c 西東風帆又浪楫、愧吾生涯輕於葉、旧交易違況新交、

咫尺千里山重疊、

d 思君心似恋花蝶、清容況与素聞愜、離歌明日西出関、

三疊々々又三疊、（オ）²²

e 寺古壁老留狂斐、依然鶯梢与燕卉、曾遊屈指已十年、

借問殘僧今有幾、

f 不管春寒花較遲、村僧疎懶分之宜、愁工夫外別無事、

一個蒲团十二時、

g 萍寄雲遊西又東、愁情多在默存中、滿頭雪上加霜去、

陣々春風吹不融、

h 餘寒暗雪滿蓬華、非梅争說新曆日、狂吟自愧了無期、

又被春惱呼禿筆、

i 身在青山心丹辰、雖春猶未知和氣、不悟餘寒勒花來、

祇言正月喧鶯未、

j 風搖松竹亦書声、勤学堂前春夢驚、期在佳名滿天下、（ウ）²²

生平覃思又研精、

k 世無俊逸与清新、（李白）李杜唱酬誰共論、唐体非難君可効、

詩奴亦是祭詩神、（杜甫）

l 一年過了一年來、每向東風多所思、好展鶯花權柄手、

尽驅春色入新詩、

m 人如野鶴在鷄群、吾似蒼蠅附驥尾、春來花亦材不材、

早梅落尽晚梅未、

n 吾興未濃君興濃、能令才思与春同、筆頭從一生花后、

始信人間有化工、

o 旅窓斜掩春寂寞、新年感君尋旧約、寵風恩露及花不、

臣有辛夷僕杜若、（オ）²³

p 人才元雖有取捨、（朝）聖恩何曾分明野、々生同樂又同春、

広厦万間茆一把、

q 近來隱逸棄如埃、幾日皇家結網恢、半是池塘半雲雨、

終無一夢及賢才、

r 紅塵隔斷白漚涯、不繫虚舟到处家、自怪春來数宵夢、

片時合眼在京華、

s 從來識字憂患始、胸無一丁亦聊爾、昨日忘筭今日苔、

周利槃特是吾比、

t 臣負君耶君負臣、生來不遇各參辰、（嚴光）當時嚴子成何事、

只合終身在富春、

u 人間万事付一黙、花有衰謝月有蝕、好以遐寿献吾君、（丁）²³ウ、^{（ハ）}二アリ、

青松不改古今色、

v 三十年来多病身、除形影外与誰親、別床異被無方藥、

意足不求秦越人、（扁鵲）

w 旅寓無詩争写懷、夷山洛水隔天涯、聖朝棄物唯吾独、

四海一家兄弟皆、

x 不如棄人間解印、功名未立霜侵鬢、請君勤可惜三餘、

荏苒光陰疾於駿、

y 只為焚膏油繼晷、尽道名下無虛士、状元他時若攀花、

姚家黃耶魏家紫、

z 竹君在右花在左、引詩友人春風座、山林叢林雖無差、

除却同門誰許我、一〇二四

aa 叢籍歎吾官獨卑、從天所賦合無私、孔丘盜跖雖同老、

聖益聖兮痴益痴、

bb 恨人不足恨春風、徑路無媒何日通、獨立柴門凝望眼、

碧雲淺処夕陽紅、

天戌灯宵天文七年一五三八

153 天英扇防吉敷郡 在防之定林掌藏局者、諱曰宝、予嘗字之以天英、遂出紙、需贅

拙傷、其志不可拒、強把秃筆云爾、

一枚古鏡一高穹、万象森羅在此中、鉄樹花開祇劫外、

榮光日々是春風、

天文丙午春王初吉二五年一五四六

前臨川策彦野衲周良 一〇二四

154 夢北野君菅原道真

夢尋北野旧祠堂、菅相出迎情不常、縱我無詩有神助、

炎天梅藥覺猶香、

余遊遊 林泉緇郎、一宵夢与菅神遇、遽トシテ然謂余曰、願公仮

一辞而及諸老以記焉、則幸又幸也、余塞其責、以夢北野君為

題、遂就扇防吉敷郡 定林精廬、映驥筵作者十人、箇々負英、才秀出于文

雅之林者也、曾端伯花中十友可想見矣、時維炎天得神助於梅藥

者、可謂枕上無閑夢緇郎、從此手不積卷、口不絕噲、孜孜而

勤、則謝家春草風、斯世下乎、吁、

155 祈禱諸經品目天文六年一五三七

奉看閱

大般若經全部六百卷、

觀音普門品、大悲神咒、消災神咒、

滿散

大仏頂万行秘密無上神咒、

右、攸鳩殊勲、廻向十恒沙仏陀耶、祝猷尽扶桑神祇等、顯說般

若、密說般若、消遣群魔、大底苾芻、小底苾芻、儼然一会、宓願、

大檀越 奕葉嘩々、寿算綿々、

英略冠時、戰必勝攻必取、丁付一八ノ魂圖アリ

蒼生懷惠、近者悅遠者来、

輔翼

皇家、金湯仏法、一五四二

天文十一年春二月初十日謹誌

156 暑夜夢雪 代人 風雅主人

暑自黑甜鄉裏疎、六花雖夏縞茅廬、朝来原得夜来夢、

諸老清詩雪不如、同

157 曉天堪喜一場夢、巽二涼人膝六堆、

却疑夢作白鷗去、不受人間紅暑塵、

158 顧視虚空笑滿腮、閻浮兜率総塵埃、只将七十二汀月、

一布囊中盛取来、策彦周良 怡齋散積贊一〇二六

160 是歲七月之末、予茅屋為大風甚雨所破、顧若無尺椽者、不忍目

視、茲有 怡雲翁辱見問予平安、翁曰、風雨皆天也、天作孽、

何可違強恨秋風、則愚益益聽其言而不掛懷、遂坐漏痕而閑

話、々罷、書野詩二章、奉上 翁、以需 高和云、景敢頓首

a 此門自此復誰敲、風雨夜來漂我巢、万点雖無飄碧瓦、

三重唯有卷黃茅、

b 風伯怒号秋夜寒、茅飛未了雨漫々、三間漏尽無眠処、

恨殺床頭湿不乾、

161 杜少陵有茅屋為秋風所破歌、千載之下膾炙于牛童○26馬走之○27口、可謂出入古今也矣、余偶以事停錫於防城、今茲秋七月、卒○28風暴雨、神昏氣變、於是乎、白茅之屋、黃葉之寺、飄瓦摧垣者三七

非一、龍翔禪刹亦嬰其餘殃、刹主玉圃老人、以与余有識荆之

好、往問之安否、老人出応曰、風雨非一人風雨、々々乃天下

風雨也、苟審容膝之易安、則寒亦在其中矣、遂出攸作之二詩、

以見需拙和、披而視之、藹然有杜陵庇寒之氣、不意李唐後、復

聞大雅音、卒統狼者六絶、且感 翁高懷、且述余卑懷云、

周良稽顙（策彦）

a 公好甘閑避客敲、却嫌燕補去年巢、書中為有黃金屋、

一任狂風來拔茅、○27

b 門厭僧敲況俗敲、感君風雨護書巢、人生若是不知足、

玉殿瓊樓亦把茅、

c 閑門深鎖絕推敲、吾恋吾鄉鳥恋巢、朋在遠方今不忘、

憶雖風雨問衡茅、

d 秋縱風酸又雨寒、詩人屋宇興何漫、長々短々費吟処、

不識漏痕乾未乾、

e 非啻閨寒衣又寒、夜窓風雨黑漫々、何為秋到人間早、

鬢葉添霜楓葉乾、

f 詩律君無賈島寒、袖中吾有禰衡漫、不才可愧一場和、

疎懶多年筆硯乾、○27

162 龍翔主盟玉圃緇郎、有屋為大風所破之二詩、策彦老人見和以（周良）

a 六詩、嗚呼、惡何必惡微風雨焉、聞許多善言乎哉、予也辱末契

於二老、我不可默止、遂奉塵尊韻云、点削多幸、孤竹頓首（珠重）

b 吟仏縱來門不敲、今無月在老龍巢、狂風送雨吹連夜、

補漏為君誰貢茅、

c 門雖設厭向人敲、平日藏書獨護巢、天到詩辺無老眼、

秋風吹卷杜陵茅、

d 旧雨來人今雨敲、嗟君一日忽漂巢、消磨未尽世間事、

又可明朝勞結茅、

e 五十年來我独寒、回頭天下夜漫々、簷間積雨已吹断、○28

淚眼濛濛晴未乾、

f 一夜說書風雨寒、疎灯影裡字如漫、我今老矣決無睡、

聽到空塔点滴乾、

吾詩儉陋与酸寒、君筆十韓并五漫、唐後再看秋雨嘆、

淋漓醉墨不成乾、

163 吾龍翔老人有風雨偶作、予卒効響以六絶、孤竹翁擊節而聳和、

可謂錦上鋪花也、予雖鷲鈍、倘膠口、則風流之情難償、重前韻（債）

索一咲於三文友、只恐生瓦礫在後之詭矣、伏希運斤、周良拜稿

雨時敲勝月時敲、誰訪門頭窄似巢、旅屋漏痕無力補、

勅奴道是爾于茅、

〔墨付十一丁〕（異筆） ○28 丁付十一丁アリ